

新設校への赴任にあたって

前蘇州日本人学校 教諭

静岡県浜松市立双葉小学校 教諭 古橋 智一

キーワード：日本語補習授業校，新設校

1. 日本語補習授業校から日本人学校へ

1997年 1月	蘇州日本語補習授業校運営委員会発足 蘇州日本語補習授業校運営委員会規則制定
1997年 4月12日	蘇州日本語補習授業校開校 毎週土曜日（週1回）の授業開始
2004年 1月17日	蘇州日商倶楽部総会にて会員の総数を得て，蘇州日本人学校の設立準備を進めることを決定
2004年 4月 8日	蘇州市教育局より，蘇州日本人学校設立の同意を得る 蘇州日本語補習授業校，在籍児童生徒67人となる
2004年 5月14日	日本政府へ蘇州日本人学校設立申請
2004年 6月 6日	蘇州新区政府，日本企業代表者出席のもと，校舎建設基礎式が挙行される
2004年 7月	蘇州日本人学校校舎第一期工事着工
2004年 8月	中国政府へ蘇州日本人学校設立申請
2004年12月24日	日本政府より蘇州日本人学校の予算の許可がおりる
2005年 3月12日	多田賢一初代校長が着任
2005年 3月26日	蘇州日本語補習授業校閉校
2005年 4月 1日	谷本利勝運営委員長就任
2005年 4月 6日	文部科学省派遣教員6人着任
2005年 4月14日	平成17年度第1学期始業式，入学式を挙行し，開校する （児童生徒数63人）
2005年 4月19日	法人登記書を中国政府より受け，学校として正式認可される

日本語補習授業校開校から8年を経て日本人学校開校となった。日本語補習授業校では，80人位の児童生徒が通学していた。蘇州にはインター系の学校が2校，日本人が入学できる中国系の学校が1校あり，そこに通学をしながらの子どもたちがほとんどであった。そのうち10人位が日本人学校に入学し，合計67人でのスタートとなった。

蘇州日本人学校は，中国では珍しく蘇州市新区の斡旋・協力のもと学校設立となった。ただ，設立にあたって，省や国家への説明や対応に苦慮したようである。様々な苦勞の結果，中国で初の政府認可の日本人学校となった。そのため，領収書の発券や印鑑の作成，銀行口座の開設など公の活動ができるようになった。また，校舎の建設にも苦勞があったようで，設計士が日本人なので中国の基準に合わなかったものもあった。

2. 入学式にいたるまで

市政府からも歓迎されて誕生した蘇州日本人学校であったが，大きな問題が生じた。それは，開校式のことである。直前まで，市政府からも市をあげて開校式をあげたいと申し出があったり，日本の行政からも参加をしたいと

の意向があったりした。しかし、赴任直後、日中関係問題が起こった。そのため、開校式は行わず、市政府からの参加者はなしで、日本政府からは上海総領事館の3人のみの参加となった。入学式に関して、中国政府は庇護してくれるとのことであったが、民衆までは押さえられないという想定がされた。そのため、公安を道路や門に配置して厳重な警備で行ったり、保護者も目立たないように入校するよう呼びかけたりした。当日は、デモやその他の活動は行われず、無事、着任式、入学式、始業式を開催することができた。

3. 新設校としての苦勞

(1) 教材・教具が届かない

学校が始まり授業が行われるようになって、指導書を始めとする各教科の教材・教具が日本から届いていない状態が続いた。理科の実験道具、体育のボール、社会の資料集、各教科の問題集など授業に使うものが一切無く、手作りの教材・教具で授業を進めていった。結局、指導書が届いたのは9月に入ってからであった。

(2) 現地調達の難しさ

現地にあるものや利用できる物は、なるべく現地で揃えていった。画用紙やタフロープにいたるまでいろいろ試してみた。運動会のボンボンに使うタフロープは今のところ見つかっておらず、日本から取り寄せた次第である。ボールにいたっても、日本のような多種多様なボールが無く、結局日本から取り寄せた。しかし、日本よりも安く手に入る物もあり、便利なこともあった。

(3) 昨年度の実践がない

昨年度の例が無く、最初から考えなくてはならない事柄が全てであった。しかも、派遣教員の出身により考え方ややり方も多種多様であった。そのため、初めから作り直し、考え直しという作業が生じた。生みの苦しみはあったが、学校活動を真剣に考える良いきっかけとなった。ただ、保護者も多種多様な地域や考え方であったため、理解を得るには努力を要した。

(4) 現地スタッフとのコミュニケーションの難しさ

本校には、中国の方の警備員が十数名、清掃の方が十数名と現地の方の協力のもと成り立っている。しかし、赴任した当時は、コミュニケーションが上手にとれないうえ、文化の違いによる意識のずれに戸惑いを感じた。

警備の方の車の誘導の仕方提案をしたとき、校長先生の指示にもかかわらず、会社の直属の上司の指示ではないということで納得がされなかった。また、芝生の維持を怠ると自分の責任になるということで、敷地内全てに除草剤をまき、さらに畑の一部にもまいてしまった。今では納得をしてもらい、スムーズに業務が行えるようになった。私たちも現地の言語や文化を受け入れ、互いの心が通じ合うようになってきた

4. 日本語補習授業校への支援

(1) 支援の概要

日本人学校の役割として、近くに在住している日本人への教育支援や近隣校の協力も担っている。中国には、当時8つの日本人学校があり、日本語補習授業校の設立は各地で話があった。江蘇省では、無錫日本語補習授業校と南京日本語補習授業校が設立された。その他にも、揚州や昆山なども話があると聞いている。

蘇州日本人学校から車で30分のところに、江蘇省無錫市がある。その無錫市の有志の方たちによって、平成18年4月に日本語補修授業校が設立された。そのため、文部科学省から授業支援を依頼され、研修を行った。

(2) 支援にあたっての感想

保護者からの意欲でできた補習授業校であり、この学校ができたことで無錫の日系の方は大変喜んでいる。しかし、今後の課題も多いのも事実である。

子どもたちは、中国人の親をもつ子がほとんどであり、日本語を必ずしも学習しなてはいけないという子どもばかりではない。従って、授業中も中国語で会話をしたり、先生の言うことを聞かなかったりと授業を受ける態度が取れていない。また、日常の現地校の宿題が多く、補習授業校の学習はできていない。保護者は、子どもたちが日本語なのか中国語なのか英語なのか、母語をどこにするか決めかねている。先生方は、日ごろ自分の仕事をもっており、忙しい中ボランティア状態で教えにきている。そのため、2か月ごとに先生が入れ替わってしまい、教育効果が思ったように上がらない。

補習授業校は、日本人学校と違って、いろいろな環境や考えの子どもや保護者、先生方がいて、今まで経験した教育をするのに難しいところがあると感じた。ここの補習授業校は、まだできたばかりで戸惑うことも多い。しかし、保護者と学校、そして日商倶楽部との連携を密にしていけば、好ましい教育環境が作られていくと感じる。

5. 赴任を終えての感想

新設校への赴任という、貴重な経験をさせてもらった。この経験が、日本の学校でそのまま通用するわけではないが、いろいろなヒントを与えてくれると思う。一人一人の状態を考えた教育、現地の環境を取り入れ趣向を凝らした教育、周りの方々の協力があつての教育など、教育の原点を考えさせられた。

世界には、日本の教育を受けたいと願っている子どもたちが多くいる。この子どもたちのことを考えると、日本の子どもたちが恵まれていることを感じる。この恵まれた環境の中で、感謝の気持ちをもたせながら、教育を受けさせていきたい。